

一度振られた
幼馴染のお情け
で卒業させてもらおう話

曇天土鳩



本編



幼馴染のダメ出し

白く柔らかい膨らみに指が沈み込んだ。バスローブからのぞく思春期の肌はきめ細かく、しっとりした感触が手のひらに吸い付く。俺の手の動きに合わせてお椀型の乳房が形を変え、その中心を飾るピンク色の乳首が上下する。

生まれて初めて触れる女の子のおっぱいはあまりに魅力的だ。しかも相手は初恋の美少女。これに興奮しない男などいるはずがない。

「小田君。乱暴すぎてちよっと痛いんだけど」

「えっ！ あっ、ご、ごめん結花」

目の前の幼馴染、酒井結花は冷めた顔で俺を見ている。その綺麗な瞳のどこを探しても好意は見つからない。彼女にとっては今している行為はあくまでポランティアなのだ。

そんな義務的な表情でも結花の可愛さはまったく損なわれていない。

鎖骨にとどく長さの黒髪は艶やかで、天井からの光に輝いている。整った顔立ちに大粒の瞳。小さな唇は桜色だ。キスを禁じられているのが今更ながら恨めしい。

俺より頭一つ低い身体はスレンダーなのに、手からはみ出すおっぱいは綺麗で、その感触はさっ

きからずっと思い知らされている。

別クラスである結花と廊下ですれ違っただけで、男たちが話題にするほどの美少女なのだ。そして俺にとっては初恋と失恋の相手でもある。

小学生の時に隣に引越して来た結花に一目ぼれしてから、ずっと好きだった幼馴染に告白したのは二年と少し前。高校一年の夏だった。

「ごめん。悠のことはそういう対象に見れない。それに私もう付き合ってる人いるから」そう言われた時のショックは今でも覚えている。

ちなみにその翌日から結花の俺への呼び名が「悠」から「小田君」に変わり、それがきっかけでクラスに失恋の噂が広まった。

結花と仲がいい俺に嫉妬していた男子の何人かからどれほど馬鹿にされたか。二年でクラスが別々になるまでことあるごとに揶揄われて結構辛かったのを覚えている。

何なら女子にまで結花によっぽど嫌がられるような事をしたんじゃないかって疑われたのだ。

「やっぱりガツくんだね。予想通り過ぎてちよつと引くかも。手もなんかごつごつしててリオと全然違う」

「ッ！ 悪かったな下手で」

お情けで相手をしてもらつてると分かつていても、その名前には反応してしまう。隣り街の高校の運動部エースだというそいつは結花の恋人だ。つまり俺にとっては初恋を奪った男だ。

当然何度となく結花とセックスしているのだろう。知る限り結花が付き合つたのはそいつが初めてだから、結花のバージンもそいつが……。

「童貞のままじゃ小田君が落第しちゃうから仕方なくさせてあげてるんだよ。……真知子さんが悲しむと思わなきゃ絶対にこんな事許さないのに」

結花はついにため息をついた。

そう、結花が一度振つた男にセックスさせてくれるのは、幼馴染としての情ですらない、小さなころから結花を可愛がつていた俺の母親を悲しませたくないという理由なのだ。

考えられるかぎり最高の相手と、最悪の形で初体験。この歪すぎる状況は今日の放課後、俺が

担任教師に呼び出された時にさかのぼる。

童貞禁止法

「男子の中で未提出はおまえだけだぞ小田。卒業まで半月切ってるのにどうするつもりだ」

担任教師は名前以外空欄の書類を机に出して言った。書類の一番上には『性交証明書』と太字で書かれている。

『童貞禁止法』という屈辱的な通称を持つ法律が出来たのは三年前。少子化の理由を若い男の草食化として、男子は高校卒業までにセックスを経験することを促進するという内容だ。1.0を切った出生率に焦った政府が強引に成立させたらしい。

促進と言っても実際は義務化で、性的嗜好や健康を理由にした免除対象じゃない限りペナルティが課される。ちなみに女子には何の義務もない。自己決定権の重要さが云々ということらしい、男のそれはどこに行った？

「このままだと卒業できないんだぞ。せっかく受かった大学はどうするんだ」

担任教師は指で机をトントンと打った。学校の評判にも関わるし、担任としての評価も下がるの
だろう。

「保険の三上先生がな。ボランティアしてもいいと言ってくれてるんだ。いい機会じゃないか」

「それは……ありがたい話だとは思いますが……」

保健室の女神こと三上友梨佳先生は二十六歳、茶色の長い髪を上品に束ねた美人で、白衣を押し
上げる巨乳が男子生徒の目を釘付けにする。

三上先生に筆おろししてもらったとなればうらやましがる男がいくらでもいるだろう。それでも
俺は首を縦に触れなかった。

「提出後の確認もあるから期限は後一週間だ。それまでに出せなければ学校もどうしてやることも
できないからな」

担任教師はそういつてその紙切れを俺に押し付けた。

……………

「小田君？」

重い足取りで家の近くの公園まで来たときだった。白いサンダル足の俺の目の前で止まった。
「ゆい……っと酒井さん。久しぶり」

久しぶりに言葉を交わした幼馴染は季節を先取りするような淡い色どりの私服姿だった。

アイボリーのニットに淡いブルーのフレアスカート、肩には小さなショルダーバッグを掛けている。しっとりと輝く黒髪には銀のヘアピンが光を添えている。明らかに気合が入った服装だ。

昼前に学校を出たはずの結花が今駅の方から歩いてきたということは、隣り街の彼氏とのデート帰りだろうか。

幸せの余韻に包まれている幼馴染から目をそらす。「じゃあ……」と言って背を向けた。

「ちよっとまって。なんか深刻そうな顔してるじゃない」

一刻も早く場を離れたい俺の気も知らず、結花はそう言って止めた。

あの時以来露骨に距離を取ってるのに、なんでこんな時に限って……。

……

「えっ！うそでしょ。小田君まだなの？」

小さなころ一緒に遊んだ公園のベンチに幼馴染の驚きの声が響いた。

「どうするの？ 卒業まであと二週間だよ。えっ！とこう言うのって確かボランティアしてくれる人とか……」

「そう言う気分じゃないんだ。っていうか誰のせいでも……なんでもない」

情けないことを言おうとする口を閉じた。だけど結花は何かを悟ったような表情になった。

「もしかして私のせい？」

「……酒井さんのせいじゃない。もういいだろ、別に命を取られるわけじゃないさ」

こんなふうに初恋を引きずるのはばかばかしいって分かっている。ただどうしてもそういう気分にならないだけだ。あくまで俺の内心の問題。

「よくないよ。この前真知子さんと話した時、悠が大学に合格したって嬉しそうだったよ」

結花は俺の母親の名前を出した。母さんと結花は今でも仲良しだ。アパートのお隣さん同士、ドアの向こうで楽しそうに話してるのがたまに聞こえる。

もちろん母さんと結花が俺のせいで気まずくなるよりずっといい。ただ今の状況で言われたら苛立ちが募るだけだ。

「……じゃあ酒井さんが卒業させてくれるっていうのか？」

やけっぱちの気持ちで言った。ここまで言えば解放されるだろう。案の定、結花はだまってしま
う。

気まずい空気から逃げるようにベンチを立った。これ以上みじめになりたくない。今の俺以上に
惨めな存在があればの話だけど。

「一回きりって約束できる？」

「……はっ？ えっ？」

背中に掛かった声に思わず振り返った。結花はどこか覚悟を決めた顔で俺を見ている。

「私がボランティアしてあげる。それでいいでしょ」

「待てよ。酒井さんには……恋人がいるんだろ。そいつに悪いと思わないのかよ」

「思うに決まってるでしょ。でも仕方ないじゃない。このままじゃ……真知子さんを悲しませるのは
いやなの」

結花は何とも言えない表情を浮かべた。

「どうする？ 後は小田君しただよ」

*** 本編体験版はここまでです ***

特典
..
結花視点

（ゴメンね、莉央）

心の中で恋人に詫びながら、私は目の前のパネルから部屋を選んだ。

私の中では男とのセックスはノーカウントだけど、どう言い訳しても恋人への裏切りだ。それに迷いが無いかといえば嘘になる。

それでも私は悠のお母さん、真知子さんを悲しませたくない。

機嫌が悪くなると母に暴力を振るう父と、そんな父を怒らせないことだけを考えていた母。家に居たくない私を受け止めてくれて、娘みたいに可愛がってくれたのが真知子さんだ。

悠の告白を断った後も変わらず接してくれた。そんな真知子さんが悠の名前をポロツと出したのが、志望校に合格したという話だった。

だからこれは真知子さんへの恩返し。

それに……あんな顔見たら見捨てられないよ。

シャワーの後、ベッドに移った。「キスはダメ」と最初に釘を刺すと悠は一瞬悲しそうな顔にな

った。でもこれは譲れない。そもそも悠を卒業させるためにセックスするだけなんだから。

……をあげるだけでも感謝してもらわないと。

悠の手でバスローブの前を開かれた。おっぱいを見られるのは小学生の時ぶりかな。流石に恥ずかしい。

悠は眼の色を変えて私の乳房を揉み始めた。



男にされるのはもっと怖かったり気持ち悪かったりを創造してたけど、思ったよりは抵抗がないかな。やっぱり昔から知ってる幼馴染だからかな。

ただやっぱり莉央とは全然違うけど。

悠にとつて初めての体験だから、ある程度は合わせてあげたいけど、女の子を乱暴に扱っていいと勘違いさせるのは今後のためにならないよね。

「小田君。乱暴すぎてちよつと痛いんだけど」

「えっ！ あつ、ご、ごめん結花」

悠は慌てて手を離れた。

「やっぱりガツくんだね。予想通り過ぎてちよつと引くかも。手もなんかごつごつしてるし。リオと全然違う」

「ッ！ 悪かったな下手で」

辛そうな顔になる悠。確かにこういう時に別の名前を出すのはマナー違反だったかも。私もいろいろ混乱しているみたい。

「これくらいなら大丈夫か」

「うん。今くらいなら痛くないかな」

悠の手つきは一転してこわれモノを扱うようになった。欲望を優先しないことに少しほっとした。

「ーッ」

指が乳首に伸びてきた。固い指に敏感な突起を弄られる。痛いというよりもくすぐりたい。吐息が漏れてしまいそうになるのを堪えた。

生唾を飲む音。「舐めてもいいか？」と悠が聞いてくる。そんな目で見られたらいいって言えない。

頷いてあげるとすぐに胸に吸い付いてきた。やっぱり莉央と全然違う。悠の舌はねちっこくて……おっぱいがあつという間に唾液まみれにされてしまう。

そう言えば男とするのを食べられるっていうんだっけ。女の子をモノ扱いなんてやっぱり最低だ。

「ーッ！そんなふうに舐められると……くすぐりたい」

乳房を揉む手がいつの間にか強くなってる。でも今度は痛くはない。悠が私の胸の扱いに慣れて

きたのがちよつと癩だ。

「こ、こら、強くしちやダメっていつて……ンツ。ど、童貞だからってあかちゃんみたいに吸って……ンンツ!？」

乳首に吸い付い付かれた。こんなふうに遠慮なく吸引されたことはない。男って本当にあかちゃんみたいに吸うんだ。

「結花のおっぱいすごくおいしい」

「ちょ、ちよつと! あじとか……ンツ、いわなくていいから……ほんとにデリカシーない……やつ、そんなにしつこく先ばっかりされたら……ンンツ、ンツ!」

デリカシーのない言葉に頬が熱くなる。なのに悠が吸いつくたび身体が勝手によじれる。がつつかれてるのに反応してしまうのが悔しい。

悠は私のおっぱいに完全に夢中で、揉みしだきながらチュウチュウと乳首を吸い立ててくる。

「もっと優しく」と注意しようとした時、乳輪ごと強く吸われた。莉央より硬い唇で乳首をこそがれ、舌先が先端を繰り返ししつこく刺激する。

「アッ、悠の舌がいやらしくて……ンンツ!？」

変な声が出てしまいそうになった私は必死に首を振る。いつの間にか私は「小田君」じゃなくて「悠」って呼んでしまってた。

*** 体験版はここまでです ***